

クトゥルフ神話TRPGを
やったらPLが酷かった
りファンブルが出ま
くったりしたのでKPの
胃が大変です

釣りキチ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「クトゥルフ神話TRPGやろうぜー」男は某SNSでそう発言した。

そして始まるファンブル塗れのクトゥルフ神話TRPG。

笑いあり涙ありのコメディー的恐怖が幕を開ける——！

本作は1月中旬に行ったセッションを小説化したものです。

PLが色々アレですが楽しんでみてください

全3部構成

第一部：とおりやんせ（クトゥルフ神話TRPGやろうぜ）

第二部：霧の都（オリジナル）
第三部：鏡界線（オリジナル）

目次

プロローグ

クトウルフ神話TRPGやるけど是非

もないよネ!!!

別にキャラ紹介をしても構わんのだろ

う?

ファンブル・ノスタルジック

三枝 和人の憂鬱

KPとPLと宇宙的恐怖

ファンブルは辛いよ

彼が夢想したモノとは何か

始まりは唐突に

幕間の物語：鈴風ちゃんは陰が薄い

29

24

19

15

11

6

とおりやんせ

34

始まりのS／ようやく始まるクトウル

フ神話

消えた葉月

消えた腕

発狂だね？わかるとも！

ファンブルの申し子

葉月の行方

幕間の物語：中の人は茶番が好き

68

シリアスは続かない

焦燥感

76

72

63

58

53

48

42

38

クール系キャラはキャラ崩壊を起こす

の法則 ————— 80

RPは大事 ————— 85

推測 ————— 90

メタな事は一回は言うのがお約束

96

話は進まない ————— 101

プロローグ

クトウルフ神話TRPGやるけど是非もないよネ!!!

「クトウルフ神話TRPGをやろうぜ！」

某SNSのグループ内で発言されたその言葉は一部の人間達の心に響いた。

まあ本当に一部の人間だけなので大多数はクトウルフ神話？何それ美味しいの状态である。

そんな折に一人の男が質問の声をあげた。

「はい先生！シナリオはどうするんですかー？」

「先ずは少人数でやる為にクローズド系でも……」

そう言った矢先である。

各所から「俺もやる」「じゃあ俺も」などの声が上がっていた

「先生ー？この人数でクローズドやるのー？シテイやろうぜシテイ」

「ええ……私シテイなんて経験無いんですけど……」

「大丈夫大丈夫モーマンタイ君なら出来る出来る」

まあいつかの感覚で決まってしまったようだ。

「うん、そだよ」

「あ、貴方これでどうやって戦うんですか…?」

「火炎瓶作って投げます」

「う、うん?」

火炎瓶である。

流石のKPもこれは予想外だったようだ。

「KP次はこっちのキャラシ見てよー」

PL2がそう言った

「あ、うん」

そして目を通すとコイツも武器が酷かった。

何かって? スタンガンだよ。

「スタンガンって何判定だっけか…」

「こぶし判定です」

「貴方こぶし幾つですっけ…?」

「初期値」

「今、なんとおっしゃいましたか?」

「初期値って言いました」

既に胃が痛い。

K P、負けるな。

「K P、次は私の送りますね〜」

「ああ……? うん……」

P L 3がそう発言する

既に意気消沈気味である。

「あー……うん、技能はいい……ね?」

職業を見て絶句した。

イラストレーターである。

イラストレーターってどうやって絡めれば良いのか彼には分からなかったようだ。

「K P! 次は俺ね俺!」

P L 4である。

「あ、凄い。問題ないやこれ。」

「キャラの性格も考えてあるんすよ!」

「お、言うてみい」

「チャラ男です! 朝風呂大好きのチャラ男探偵です!」

面倒臭いキャラが来てしまった。

K Pの胃は本当に大丈夫なのであろうか。

「あの、K P?送るよキャラシ?」

P L5である。

これで最後だよK P。頑張れK P。

「…マトモだ…凄く…マトモだよ…」

「うん、そうであろう?医者だよ医者。医者の卵研修医」

某仮面ライダーであろうか。

まあ一番マトモだったので良しとしよう。

「じゃあ、やりましょうか…セッション…」

遂にセッションが始まるようだ。

死ぬな、K P。

別にキャラ紹介をしても構わんのだろう？

名前：雑賀 峰人（PL1）

職業：探偵

STR7 CON14 POW11 DEX13

APP10 SIZ11 INT13 EDU19

HP11 MP11 SAN55 アイデア65 幸運55 知識95

投擲70

忍び歩き60 写真術50 追跡60

図書館70 目星70

製作（使い捨て用品）60

言いくるめ50 信用70 説得40

法律60 日本語95

お馴染みの火炎瓶野郎である。

後々酷い目に遭ったりするが楽しみに待っていて頂きたい

名前：三枝 和人 (PL2)

職業：探偵

STR16 CON13 POW13 DEX10

APP7 SIZ8 INT14 EDU13

HPL1 MP13 SAN65 アイデア70 幸運65 知識65

回避31 スタンガン70

鍵開け50 隠れる40 聞き耳60 写真術35

日本語65 図書館75 目星65

言いくるめ70 信用25

オカルト50 心理学25

スタンガン野郎である。

三枝探偵事務所を経営しているようだ。

ちなみに火炎瓶野郎の職場もここである

名前：鈴風 蘭 (PL3)

職業：イラストレーター

STR12 CON14 POW10 DEX13
 APP16 SIZ13 INT17 EDU15
 HP14 MP10 SAN50 アイデア85 幸運50 知識75
 回避56

応急手当て60 聞き耳75 図書館60 目星65

製作(地図)75 日本語99

オカルト66 芸術(絵)70 歴史85

導入で最も絡ませ難いキャラNo. 1であろうキャラ
 後々ビッチ扱いされることになるとは誰も知らない

名前：白澤 達也(PL4)

職業：探偵

STR10 CON14 POW14 DEX12
 APP10 SIZ12 INT15 EDU18
 HP13 MP14 SAN70 アイデア75 幸運70 知識90
 回避60 こぶし60
 応急手当て60 鍵開け50 隠れる70 聞き耳50

忍び足50 写真術60 精神分析60 目星59

日本語90 言いくるめ60 法律57

ジーザス、お前も探偵か…

チャラ男である。

鋼の精神を持っているようだ。

三枝の職場で働いている。

名前：川崎 歩夢 (PL5)

職業：研修医

STR11 CON12 POW12 DEX12

APP14 SIZ16 INT16 EDU16

HP14 MP12 SAN55 アイデア80 幸運60 知識80

回避64 組み付き70

応急手当で70 聞き耳45 図書館70 目星55

信用40 説得70

医学50 化学60 コンピューター50 薬学28

日本語80

今作の常識人候補である。

コイツが物語の鍵を握ることになるとは誰も知らなかったようだ。何気にコイツも導入が面倒くさかったり。

名前：名無しのGM

職業：KP

今作の苦勞人枠である。

そのストレスのためか時々茶番をしたりしなかったり

ファンブル・ノスタルジック

三枝 和人の憂鬱

季節は夏。

彼はとても陰鬱な日々を過ごしていた。

「…依頼が…来ない…」

彼の名は三枝 和人

この事務所の経営者である。

「所長…腹減っちゃまったよ…」

そして彼はこここの従業員である雑賀 峰人である

「所長…前はいつだっけか…?」

「前回の仕事は二ヶ月前ですよ…」

「二ヶ月…前…」

「ええ…二ヶ月前ですよ…」

彼らの体力は既に風前の灯火であった。

そもそも探偵という仕事自体稼げない職種なのだから仕方ないのだろう。

まあ彼らにとっての最大の問題は彼なのだろうか。

「また彼奴は風呂に入ってるのか…?!?」

「ああ…光熱費諸々があ…」

雑賀は怒りの籠った声でそう呟き、三枝は悲壯感漂う声を出していた
そんな折に浴槽の扉が開く――



「ちよつと待てKP」

「ん?なんじやつそらホイ」

「何でウチの事務所が貧しい設定なんですかあ…」

「そうだぞKP!設定にも有名な探偵って書いたじゃない!」

PL1、2が悲痛な叫びをあげる

「良いですか?探偵というのは稼げない職業なんだぞ?コロンでそう言ってた。
身もふたもない発言である

PL2が絶望の表情を浮かべているが、そんなものは何処吹く風である。

「ほらほら、次は白澤が出てくるぞ〜見てろよ〜」

「おつ!次は俺か!」

PL4が歓喜の声をあげる。



浴槽の扉が開くとそこにはサツパリとした表情をした青年が立っていた。

「いや〜サツパリサツパリ！朝風呂つてのはいいね〜」

彼は白澤 達也、ひよんな事からこの事務所に拾われたチャラ男である。

そう、今この事務所を危機的状況にしているのはこの男である。

「白澤……貴様ア……」

雑賀はまるで親の仇のごとく白澤を睨む。

「はっはっは！どうしたんだよ放火魔！」

「おまつ、お前が朝風呂やら何やらするから……！ウチの事務所が火の車なんじゃないか

！」

「いやいや、火炎瓶投げたりして損害賠償請求されるよりはマシだと思いますがね？」

「ぐおお……」

痛いところを突かれたのか雑賀は膝から崩れ落ちる。

三枝は悲壮感漂う表情で損害賠償やら光熱費やらを呟いていた。

「そんなことよりさ〜昨日手紙が届いたんだけど見る？」

その声に反応するかのよう三枝は勢いよく立ち上がる。

「依頼ですか?!? 依頼ですよね！依頼なのは確定的に明らか！」

「違うよ所長…パーティーの招待状だよ。」

「?パーティー?」

「ん、葉月さんからだ」

戸成 俊之、彼らが二ヶ月前に受け持った依頼の依頼人だ。

内容は中央タワー建設に際しての身辺調査であった。

「でさ、雑賀、所長、アンタらこのパーティー行く?」

そして彼らは一斉に行きます!!と声を大きくして言った。

KPとPLと宇宙的恐怖

「…ああ、朝か」

彼の名は川崎 歩夢

医者を目指して日々勉強中の医学生である。

彼には目標があった。

とは言ってもその目標は叶えることが出来ない夢に近かった。

彼の目標は全世界の人間を救うこと。

彼は馬鹿正直であった。

全世界の人間を救うなど出来るはずもない

誰もがそう笑った。

しかし彼は諦めなかった。

勉強は出来なかったが何とか医大を卒業し、晴れて研修医となった。

「…？メール？」

しかし、彼に届いた一通のメール。

それが彼の運命を変えることとなった

彼は知るだろう。

自分にはどうすることも出来ない絶望を

全世界の人間を救うことなど夢物語にしか過ぎないということ

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「…KP、それでその手紙ってどんななんだ?」

今まで話を聞いていたPLIが疑問の声を投げかけてくる

「手紙の内容は…少し待っていていただきたい」

「後で情報開示するって何か?」

「まあそうだな」

「なら良いだ。勸めてくれ」

「よし、じゃあ次は鈴風の導入を——」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

鈴風 蘭

それなりに名の知られたイラストレーターである。

オタク界隈では知らない者はいないと言われるほどだ。

「ああ!もう!アイデアが浮かばない!」

だが彼女はスランプに陥っていた。

誰もが陥るスランプである。

うん、凄いスランプ。

そんな折にインターホンが鳴る。

どうやら何か届いたようだ――

――彼女が荷物を受け取り、開封する。

中には現金と手紙が入っていた。

『鈴風 蘭様

今回は貴方様に中央タワーのイメージキャラクターを描いていただいた事をお礼申し上げます。

お礼に中央タワー完成記念パーティーに招待致します。

戸成 俊之より』

そう書かれた手紙が現金袋の中に同封されていた。

「パーティーか……よし！行くか！気分転換にもなるでしょ！」

こうして、彼らは図らずとも巻き込まれていくことになる。

彼らは宇宙的恐怖を味わうこととなる。

それが彼らの目の前に姿を現わす時

彼らは知るであろう。

人類の儂さを

人間の脆さを

自分が思い描いていた未来という名の偶像の無謀さを



「——でな感じで導入1は終わりなんですけども」

KPがそう告げるとPL1、2、4の顔には若干の困惑が見て取れた。

「えっ?えっ?手紙の内容ってあれなの?」

「ああ、大体手紙の内容は同じだ。」

「ああ、クッソ!期待して損したぜ!」

「まあまあ、そう言うなって」

(それに、彼らにはもつと凄いものを用意してあるからね…)

(まあ、この後がどうなるか楽しみだ…)

だが、彼は知らない

自分に襲いかかる災厄を

真の宇宙的恐怖を味わうことになるのは自分だと言うことをまだ知らない

ファンブルは辛いよ

「とりあえず探偵組は知識と目星を頼む」

「了解」

「応ともー！」

「あい」

PL2、知識65

1D100〓96

目星65

1D100〓34

「あ」

瞬間、KPはダイス目を見て固まった

まさかのファンブル。

予測外の初手ファンブルである。

彼の脳内にはあらゆる考えが浮かんでいた。

(ちよっと待てええええええええええ！予想外すぎるだろ!?えっ?えっ?えっ?初手ファン?初

側から見るとホモみたいである

ホモじゃないののホモである

「な、何すんだ三枝！こんなところで！」

「私だつて転けたくて転けたんじゃありませんよ！」

まあ、声が大きいのなんの

完全に注目を集めてしまっている

「お、おい！早く起きろ白澤！三枝！お前らホモっぽいぞ！」

雑賀がそんな事を言ったからだろうか

周りから人が離れていくような感じがした

哀れ白澤



「なんでさー！」

PL4からそんな声があがる

「今の私悪くないやい！」

PL2もそんな事を言い出してしまふ

「ファンブルは命よりも重いんだよ……！」

「そうだよ」

PL3も同調する

「と、言う事でPL3の描写をしますね」

「わかった」

「じゃあ目星どうぞで」

PL3 目星65

1D100=99

「あ」

この卓はフアンブルしか出ないのであるだろうか？

華麗なフアンブルである

「あああああああああつ！嘘だあああああああ！」

KP、0/1d10のSAN値である

KP SAN値50

1D100=51

失敗である

KPは発狂した！

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

鈴風は周りを見渡すと二人でイチヤイチヤしている男性を見かけた

彼女はこう思ったであろう

「うわぁ…本当にホモっているんだ…」と

軽蔑の眼差しを二人の男性に向けるが気付かないようだ

軽く卑猥である



「待って！なんか私の描写適当じゃない!?!」

「ファンブル…ファンブル…」

どうやらKPは壊れてしまったようだ

しかし、まだまだファンブルは続くこととなる

さあ、ファンブルタイムだ

彼が夢想したモノとは何か

僕には何もなかった。

両親は幼い頃に事故で死んだ。

両親が事故で死んだ後、僕は親族からたらい回しにされた。

そんな僕を救ってくれたのは、戸成 俊之という男だった。

彼には娘と息子がいた。

息子の方はぶつきらぼうだが、優しい少年だった。

だが、優しい人間から逝ってしまうと言うのは本当のことなのだろう。

ある時、彼が癌を患っていることがわかった。

末期だったそうだ。

気付かないうちに、進行していたガンは確実に彼の身体を蝕んでいた。

救いたいと思った

でも、ダメだった。

手遅れだった。

彼の死を境に、僕は全ての人を救いたいという夢を持ち始めた。

夢が無い自分が持った、唯一の夢だった

この時からだろうか。今の川崎 歩夢という、歪んだ人間が生まれたのは

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「——久しぶりだね、川崎くん」

彼は戸成 俊之

現在、中央タワーの建設を進めている男である。

そして、親を失った僕の恩人でもある

「はい、久しぶりですね。葉月ちゃんは元気ですか？」

「ああ、元気だとも。娘が君達に会えると喜んでいたよ」

彼には一人、娘がいる。

葉月という元気な子だ

今年で17になる。

「まあ、とりあえず入ってくれ。」

「はい、わかりました」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「……とりあえず会場に入る前にやっときたい事はあるか？」

「目星しときたい」

「了解。じゃあ振ってくれ」

川崎 目星55

1D1000||21

「成功」

「やつと…やつと成功した…」

KP、泣いてしまったようである

まあ無理もないだろう

序盤からファンブル×2を出されたのだ。

かなりTRPGの経験を積んでる者でないと対処は難しいだろう

「えーつと、あたりを見回すとAPP16の超絶美人がいますね。胸も大きい」

胸が大きいはいらない情報であろう。多分。

「どうでもいい情報だな…」

PL5的にとつてはいつでもよかったようである。美人なのに

「じゃあセクションに戻るとして、ここで全員合流だけどよろしいか？」

「よろしい」

「いいとも」

「大丈夫」

「ok」

「葉月ちゃんについて詳しく」

PLIがなんか言っている気がしたがどうでもいいだろう。

「それじゃあ——」



三枝達、探偵御一行は会場に入ると意外と人数が少なく拍子抜けした。どうやら招待されているのは会社の上層部の人間によるのである。

そんな折に白澤を呼ぶ声が聞こえた

「白澤さあああああん！」

犬を連れた少女である。

見た目は十代前半ほどだろうか。

「おっ！葉月ちゃん！」

「久しぶり！白澤さん！」

白澤と葉月と呼ばれた少女が熱い抱擁を交わす

ちなみにそれを見ていた雑賀は羨ましそうに見ていた

「白澤、彼女は？」

「ああ、此奴は葉月。俺の従姉妹だ」

「従姉妹…良いなあ…」

雑賀だけ反応が違う。女に飢えているのか

「白澤さん、この人たちは？」

「ああ、俺の同僚だよ。」

「葉月さん、よろしくお願ひします」

「葉月ちゃんって言うんだ！可愛いね！」

三枝は礼儀正しく礼をする。

雑賀は軽く犯罪者である。

そんな会話をしていると背後から声が出た。

「やあ、来てくれてありがとう探偵諸君」

そこには川崎を連れた俊之が立っていた――

始まりは唐突に

「ああ、お久しぶりです。俊之さん」

三枝が俊之に向かって礼をする。

そして、白澤と雑賀もそれに習い礼をした。

「紹介しておこう。彼は川崎 步夢と言ってね。今は研修医として勉強に励んでいるよ」

「よろしくお願ひします」

川崎は軽く会釈すると、三枝の方を向いた

「貴方が俊之さんの話していた探偵さんですか」

「ええ、まあ」

お互い、どう言葉を交わせば良いのか分からないのだろう。

どうにも会話が続かない。

「ん？あれは――」

その時三枝が何かに気が付いた



「KP、目星したい」

そう言ったのはPL2であつた

「OK、わかつた」

三枝 目星65

1D100||45

「成功か…となると処理はー」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

テラスの方に黒服の男が座っているのに気が付いた三枝はひっそりと白澤に耳打ちをした

「白澤さん…テラスの方に怪しい男が座っているので警戒しておいてください…」

「テラス…?ああ、本当だ。わかつた、警戒しとく」

白澤と三枝が話をしているその頃、川崎達はー

◇◆

「川崎さん、久しぶり」

「葉月ちゃん、久しぶり」

川崎と葉月がそのような会話をしていた。

川崎と葉月の関係はほぼ家族と言っても差し支えないものだろう。

「本当に久しぶりね……もう四年くらい会ってなかったかしら」

そう話に入ってきたのは戸成 和子である。

彼女は川崎が幼い頃からの知り合いであり、半分育ての親でもある。

「確かに、もうそのくらいですかね。積もる話がありますので、また後日にでも。」

「あらあら、すっかり大人になっちゃって」

川崎と和子が他愛のない話をしている時だった、葉月が犬の散歩に行くと言ったのは

「あつ！お母さん、そろそろペコの散歩に行ってくるね！」

「葉月、最近は何騒だから気を付けるのよ！」

「葉月ちゃん！気を付けてね！」

「大丈夫だって！直ぐに帰ってくるよ！」

そう言って、彼女が消えてしまったのが今から一週間前のことである。

未だに、彼女は帰ってきていない。

勿論何もしなかったわけではない。

俺たちは必死に彼女を捜した。

しかし、その過程で――

俺たちは知った。

人間の力ではどうにもならない存在を

その異形の怪物を

呪われた街に住み着く異物を

これは、俺たちの行動の全てを記録したメモリーレコード。

次のお話は、その序章のお話である。



何処かで、本を閉じる音がした。

何かが立ち上がったのだろう、木の軋む音がした。

真つ暗な闇の中、それは居た。

黒い服を纏った20代くらいの男性である。

それは僕に近づくとこう言った。

「まだ、来てはいけない。君は川崎 歩夢として、やるべき事を成していない。」

そう発した何かは、歩き去って行ったー

これは、僕が体験した、一つの神話体験である。

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d
:
:
:
:
:

幕間の物語：鈴風ちゃんは陰が薄い

どうも、鈴風 蘭です。

ここまで目立った出番がないです。

中の人もそう言っています。

私、作者^{KP}に抗議しました。

そしたらー



「KP！私だけ出番がないのは何故だ！川崎すっごいシリアスだねオイ！」

「あはははは！仕方ない仕方ない！何処でミスったのか知らんが、川崎の過去回想で息子殺しちゃったから導入が無かったことになってしまっただけね！」

「おねシヨタ出来ないじゃん!!」

「っ?!?!」

KPはPL3の言動に一瞬ビクツとしたようだ。怖い。

「私は！シヨタが出るっていうから！おねシヨタしたかったのに！」

「ちよ…あのごめんなさい！許して！お願いします!!」

「おねシヨタアアアアアアア！」



あの野郎はおねシヨタが許せないようです。

いいじゃん。おねシヨタ。

こうさ、シヨタがお姉さんに弄られるのいいじゃん。

えっ？ダメ？ダメなの作者？



「ダメな物はダメです。大体、貴方セッション中おねシヨタしてなかったじゃないですか」

「いいじゃない、私シヨタ大好きよ？」

「でもダメですよ。これからシリアスパートも控えてるっていうのに」

「そこを何とかするのが作者だろ?!？」

怖い。シヨタパワーを持ったお姉さん怖い。なお、中の人は男である。

「ダメだつて！これから葉月ちゃんが事件に巻き込まれて、絶望がお前のゴールだしてもらわないとー！」

「川崎にあんな初期設定なかっただろルオ!? 川崎の中の人は実はトリガーハッピーだつて言えよオ！」

「やめて！それ以上言ったらウチの卓から常識人が消えちゃう！」

「じゃあさ、取引をしよう」

「取引…だと…!?？」

急な取引を持ちかけてくるとか女の人怖い。なお、中の人。

「そうだ、取引だ。次の話を私のにしろ」

「そんなモノがまかり通るとでもー」

「通っちゃうんだなあ？これがあ！君は私のおねシヨタちゅっちゅの導入パートをやっていないだろう？つまりそういう事だ」

「嫌でもシヨタがいなー」

「作るんだよオ！後付け設定をさあ！」

「何イ!? 後付け設定だとオ!？」

後付け設定。それは、物語を矛盾に追い込む禁断の果実。小説初心者の作者にとって
は難易度激高であった。

「そうだ、君は後付け設定でシヨタを出すんだ。理由は何でもいい…養子でも何でも」

「た、確かに物語には何の影響もないが…！」

「やってくれるよなあ？ そうだなあ…報酬は某聖女オルタのフィギュアでどうだ？」
「よし、乗った」



まあ、彼は了承してくれたよ。

はあ…どんなシヨタが出てくるんだろう…



KP 頑張れ。シヨタなんか負けるなKP。
ちなみにファンブルはまだまだ出るようだ。

とおりやんせ

始まりのS / ようやく始まるクトウルフ神話

葉月が失踪する1時間前――

「鈴風君、娘を知らないかね？」

シヨタと戯れていた鈴風の背後から俊之が呼びかける。

「葉月ちゃんですか？ 葉月ちゃんなら18時くらいに散歩に行つてから見てませんね」

「ああ、すまない。ありがとう」

「…もしかして、何かあつたんですか？」

「葉月がまだ戻つて来ないんだ…。もう三時間も経っているのに」

「そうですか…じゃあ探すの手伝いますよ？」

「いやいや、客人にそんなことをさせるわけには…」

「大丈夫ですつて、そんなこと気にしませんから」

「…すまない。人を呼んでくるから待機していてくれないか」

「はい、分かりました」

俊之はそう言つて彼女の二元を離れていった



「ーそれで、川崎さんは医者を？」

「はい、そうなんですよ。大変ですけど、誇りに思ってます」

三枝と川崎が談笑をしていると俊之が近寄ってくる。

「すまない、川崎君、三枝君、娘を探すのを手伝ってくれないか？」

「葉月ちゃんに何かあつたんですか？」

三枝が問いかける。

「ああ、散歩に行つたきり戻つて来ていなくてね…」

「えっ!? 本当ですか!?」

「川崎君、すまないが事実だ」

川崎が驚愕の表情を見せる。

すると何か異変を嗅ぎつけたのかナンパ中だった雑賀と白澤が戻つて来た。

「三枝、どつたの」

「ああ、雑賀ですか…葉月ちゃんが行方不明になってしまいましたね…」

「葉月が? いつからだ？」

「18時からだそうです」

「18時? それって俺らが葉月を見送つた時の時間だよな?」

「ええ、そうです。とりあえず白澤はここで待機を雑賀はー」
言いかけた時だった。

黒服の男がこちらにやって来たのは

「俊之さん、何かあったんですか？」



『誰だお前！』

KP以外の全員が同時に言う。怪しい人だと思つてた人が急に近づいて来たのだから。

「私の前探索者だ。チートになつてしまったので、ここで廃棄しようかと」

「えげつない！えげつないよこのKP！」

「おねシヨタ大好きの中でも分かりますよ！このKPはドクスです！クズの塊です！」

「ええい！火炎瓶大好きとかおねシヨタ大好きよりマシじやい！」

「スタンガン許されたよスタンガン！」

「わーい！朝風呂許された！」

「わ、わーい」

PL5は無理して同調しなくてもいいと思えます。

しかし、こうして見ると変人の集まりである。他の卓でやったら迷惑を通り越して犯

罪者である。

「ええい！ 黙れ諸君！ それにメインウエポンがスタンガンってどう言うことじゃい！」

「スタンガンはスタンガンです。ガンランスに次ぐ、ロマン武器です。」

「言っておくが、神話生物にスタンガンは効かないぞ」

「なん…だと…」

茶番である。早くシナリオに戻ったらどうだ。

「それじゃあそろそろシナリオに戻りたいんですけど…」

「あ、俺明日用事あるんですけど」

「白シャワー！」

KP、前途多難である。

頑張れKP。寝るなKP。

消えた葉月

「貴方は…?」

三枝が黒服の男に問いかける。

歳の頃は二十代といったところだろうか。

「申し遅れました。上代 雄介と申します」

「これはどうもご丁寧に、三枝と言います」

「俺は白澤、でコイツが雑賀」

「どうも」

「俺は川崎 歩夢と言います」

自己紹介をしていると女性の声が聞こえる。

「どうやら俊之を呼んでいるようだ。」

「俊之さん〜！準備OKですよ〜！」

「ああ、鈴風君。失礼、彼女は私の知り合いでね」

「あ、どうも。イラストレーターの鈴風 蘭と言います。」

軽く自己紹介を交わし、会議を始める。

既にあたりは闇に包まれており、風の音だけがあ響いている。

「とりあえず、二人一組で行動した方がいいだろう…。手分けした方が効率はいいからな…。それと携帯の電話番号も交換しといた方がいいだろう。」

上代はそう提案する。そして全員携帯を取り出し番号を登録する。

「成る程…なら白澤と雑賀、君達は七丁目の方を頼みます。」

「あいよ」

「了解した」

白澤と雑賀は懐中電灯を受け取ると玄関から外へと出る。

直ぐにその姿は見えなくなった。

「それなら俺と川崎で六丁目の方を探そう」

「わかりました。私と彼女で公園の方を探します」

◆◆

現在位置、七丁目。

街灯が少なく、薄暗くなっている。

「うつひやく…暗いな…」

「とりあえず俺が照らすから後ろにいろ」

「流石イケメンは違うね。じゃ、白澤よろしく」

「全く…お前は…」



「とりあえずチャラ男組は目星頼む」

「わかった」

「チャラ男強い。了解」

PLIが余計な事を言ったような気がするが気のせいだろう。

白澤 目星59

ID100080

雑賀 目星70

ID100064

「うわ、あつぶねえ」

「とりあえず成功だな…ならー」



ふと、雑賀はある違和感に気が付いた。

今まで全くなかった街灯が煌々と道を照らしている。

しかし、今まで確かにあった人の気配は消え、虫の鳴き声ですら聞こえなくなる。

「おい、白澤。何かおかしくないか？」

「そうか？ 疲れてんじやねえの？」

「いやいや…人の気配が無くなってるって。何か嫌な予感がするんだが」
そして虫の声を、人の気配を探すかのように彼らは聞き耳をたてる。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「聞き耳どうぞ〜」

「ダイスロール多いな…」

「とりあえず俺は初期値だから白澤頼むよ」

「OK、任せとけ」

白澤 聞き耳50

1D100=50

「危ねえ…」

「よし、描写をするとしよう」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

ー白澤の耳に、ある音が聞こえた。

鳴き声だ。犬の鳴き声である。

それが葉月の犬の鳴き声であることに気付くのに時間はかからなかった。

「雑賀！ 犬の鳴き声だ！ 葉月ちゃんかもしれない！」

「あ！おい、待てよ白澤！」

しばらく走ると街灯の下に少女が立っていた。

葉月だった。

「あ！おいあれ」

「葉月！」

「白澤さん！」

熱い抱擁を交わすと白澤は葉月に問いかける。

「葉月ちゃん！こんな時間まで何してたの？大丈夫かい？ここは不気味だ、早く帰ろう」

白澤自身も焦っているのか早口で捲したてる。

葉月はそれを止めるかのように言った

「聞いて！七丁目だけど七丁目じゃない場所があったの！そこで変なモノに——」

すると、白澤の頭に直接語りかけるかのような声が聞こえた。

『コツチヲミナサイ……』

それはノイズが掛かっているかのように乱れて聞こえた。

そして、思わず後ろを振り向いてしまった。

だが、何もいない。そこには何もいなかった。

彼の体を恐怖の感情が駆け抜ける——

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「さあ、初SANチェックだ」

「嫌じゃ！嫌じゃあ！」

「0/1D2のSANチェックだ」

白澤 SAN70

1D100=18

「これが俺の鋼メンタルだあ！」

「成功だね。減少値は0だ」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

そして、彼は葉月がいた場所に向きなおる。

しかし、そこに葉月はおらず、代わりに腕を持った雑賀が立っていた。

雑賀の顔には恐怖と焦りの感情が渦巻いていた――

消えた腕

「ふむ、これは少し描写不足だったね」

白い部屋で白衣を着た男が呟く。

部屋には机と椅子があり、机にはパソコンが乗っている。

「おや？君達は誰だい？」

その男はあなた達に気がつくと問いかけてくる。

「ああ、すまない。自己紹介をする時はこちらからだね。――私の名は華見川 朔弥。この物語を紡いでいる作者のアドバイザーの一つであり、物語の登場人物でもある。今回は少しおさらいをしようかと思つてこの姿を使っている。」

そう言うのと彼は此方にパソコンの画面を見せてくる。

そこには白澤と腕を持った雑賀が映っていた。

「君達の疑問は何故雑賀が腕を持っているのか、だね？」

彼は問いかけてくるだろう。

君達は領くと華見川に問い返す。

「どうして？」と

すると彼はこう言うだろう。

「そうか、なら少し巻き戻すとしよう：何故雑賀が腕を持っているかを知るために。——狂気が満ち溢れる世界へようこそ。探索者諸君」

彼は笑みを作るとキーを押し——

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「おい、どうした白澤——」

雑賀は白澤に声をかけようとして気付いてしまう。

葉月を包み込もうとしている無数の腕を

「え？——あ……」

雑賀の顔が恐怖に歪む。

この世にあつてはいけないであろう怪物

彼は見てしまった。彼は知ってしまった。

この世のモノではない者を。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「オラア！SANチエックだ雑賀ア！」

「ひええ……」

「I/I d 8のSANチエックです」

雑賀 SAN 55

1D100089

「ああ…」

PL1の顔に諦めの表情が浮かぶ。

そして笑みがこぼれるKP。

常識人はもうPL5だけのようだ

「1d8で振っていただく」

雑賀

1D884

「危ねええええええ！発狂一歩手前じゃねえか！」

「チツーンシナリオに戻るとしよう」

「ねえ、今舌打ちしたよね？したよね？」

「僕何もしてないよ。舌打ちしてないよね鈴風お姉ちゃん？」

「うん！してない！KP舌打ちしてない！」

「まああれだー葉月を引っ張るかい？雑賀くん？」

「ああ、引っ張るよ。ここで助けなきや男じゃねえ」

「じゃあ相手のSTRは30だよ!!自動失敗だね!!そして白澤と雑賀は幸運ね!!

「このもやしいいいいいいい!!」

PL1はリアル発狂したようだ。救いはない。

「ダイスのクソビツチが微笑むよ! やったね雑ちゃん!!」

「三枝ア!! やめろオ! てか俺貧弱過ぎイ! アイソラッドから戻って来たキト君かよオ!」

「STR30とか頭おかしい!」

訂正しよう。PL3と4以外は全員発狂したようだ。

雑賀 幸運55

1D100=65

白澤 幸運70

1D100=81

『嘘だ!!』

PL1と4の声が見事にハモった瞬間であった。

▼▼▼▼▼

「チッ!」

雑賀は葉月の腕を掴む。

すると無数の腕は葉月の腕を掴み——そのまま引きちぎった

腕に包み込まれる葉月の表情は絶望に歪んでいる。

そして彼女の顔は死を悟ったかのように表情を欠落させていた。

「ああ……嘘だ……嘘だ……」

そして雑賀は自分の腕に残ったモノを見やり、絶望する。

彼が持っていたモノは——葉月の右腕であつた。

彼は絶望のドン底に叩き落とされた。

発狂だね? わかるとも!

「…SANチェックですか」

「SANチェックですね」

「…幾つですたい?」

「1/1d3ですたい」

雑賀 SAN51

1D100=14

「1の喪失だよ雑賀君」

「危ねえ! ははは! 勝った! 勝ったぞ!」

「じゃあアイデアでどうぞ。成功したら発狂です」

「ええ…?」

六割の確率で発狂である。発狂しろ。

雑賀 アイデア65

1D100=30

「あああああん!!!」

「発狂！発狂！……あれ、これ白澤も危ないんじゃない？」

「よかった…上代といてよかった…」

「やっぱり三枝さんだね。シヨタ化しないかな三枝さん」

「やめろオ！俺の探索者をシヨタにするなあ!!」

阿鼻叫喚の地獄絵図である。

シヨタだのなんだの聞こえたが聞き間違いであろう。多分。

「じゃけん狂気ロールしましょうね〜」

「ひええ…」

雑賀

1D10=8

「周りの者の動作と発言の反復ですたい」

「反復って具体的には？」

「具体的に言うとうと投影魔術です」

「トレース・オン!!」

そうだけどそうじゃ無い。いやあってる。

「じゃあ白澤はアイデアどうぞ。それでSANチェックするかどうか決めるんで」

「ほいさ。で、幾つだい？」

「0 / 1D3だ」

「やだ、意外と低い」

白澤 アイデア75

1D100=75

「わお、ぴったり」

「0の喪失だね。あと雑賀にはクトゥルフ神話技能を1進呈」

「やったぜ」

「ちなみに上代の神話技能は43です」

「なん…だと…」

「じゃあ描写しますね!!」

▼▼▼▼▼▼▼▼

「お、おい…雑賀お前…」

「お、おい…雑賀お前…」

虚ろな目でそう返す雑賀は周りの雰囲気も相まって不気味に見えた。

自らに暗示をかけているかのように白澤の挙動と発言を反復していた。

「ふざけるのはやめろよ!! オイ!!」

「…ふざけるのは…やめろよ…」

雑賀の声が震え始める。まるで何かに怯えているかのようである。

「雑賀…」

「雑賀…」

（雑賀……そうだ、三枝なら……いや、駄目だ。アイツにこの状況を打開できるとは思えない……上代とか言う奴なら……！）

白澤はポケットから携帯を出すと上代の電話番号をタップした。

◇◆

「……それにしても、薄暗いな。これじゃ街灯なんてあつて無いようなものだ」
「気味が悪い……」

上代と川崎は暗い通りを歩いていた。

街灯がまるで機能しておらず、闇夜に包まれている。

▼▼▼▼▼▼▼▼

「よし、じゃあ幸運を頼む」

「わかった」

（じゃあ俺も振らせていただきますかね。上代の幸運値幾つだったか）

川崎 幸運60

1D100=54

上代 幸運50

1D1000||43

「出目が落ち着いてるな。早くスタンガン使いたいんですけど不審者まだです?」
「不審者は出ません。じゃあ次は目星で」

川崎 目星55

1D1000||29

上代 目星75

1D1000||97

「ああああああああ!何故だ!!」

「おおっと!ここでKPが今セッション最高レベルにファンブったああああああ!」

「ぶはははは!なんで自分でファンブル引いてんだ!!スタンガンの呪いイ!」

「シヨタの呪いですぞおおおお!」

、タイトル詐欺にはならなかったようである。

やはりファンブル祭りはまだまだ続くようだ。

ほらそこ、メタいとか言わない。

フアンブルの申し子

「せ、成功した川崎は先程まではなかった看板に気付くでしょう……上代は小さい窪みにハマってコケました……」

「草」

「死んだな」

言われたい放題である。仕方ない、実際ダサイのだから。

「超人設定は何処へ」

「ふええ……言わないでよう……ちなみに看板には八丁目って書いてあるよ……知識どうぞ……」
「……上代は気絶してます」

「起こすか踏みつけるかどっちかだね？わかるともー」

発狂してる雑賀の人には言われたくないものである。

メンタルが絹ごし豆腐ですらないのだ。ただの豆腐である豆腐。

「知識ですね……」

川崎 知識80

1D1000||94

「危ねええええええ！」

「ファンブルよ」

雑賀は先程から煩いのでお灸を据えなければならぬようだ。もつと発狂しろ。

「あー、うんじゃあ描写にー」

「その前に上代に応急手当で使いたいんですけど？いいですか？」

「いいとも！」

川崎 応急手当で70

1D100＝5

「何でこうも出目が極端なのさ!!」

「これこれ。KPよ発狂してはならぬ」

「キミはアレだね！煽るのが得意なフレンズ何だね!?!」

「すごい！キミはファンブルのが得意なフレンズ何だね！」

「面白い！」

KPだけ地獄絵図である。

「うう…じゃあ描写に戻るよ…」



探索をしていると上代が急にコケた。

ただそれだけの事である。ただそれだけの事であるが川崎にとっては怖かったよう
だ。

「ちよつと！起きてくださいよ上代さん！上代さん！」

少し手当をし、先程から呼びかけを続けていた。

すると、急に上代は上体を上げ、こう言った。

「何もないな」



「ぶはははは！馬鹿だ！」

「仮面ラ○ダーにしよう……」

「これじゃあ超人じゃなくてただのバカだよ！」

「私の元探索者のイメージが崩れて行く……さらば上代……」

確かに馬鹿である。

コケて意識を失い、意識を取り戻したと思っただけの発言である。

側から見ればただの馬鹿であろう。

「あ……うん、あれだ。上代に看板のこと教える？」

「教えるよ」

「じゃあ……」

上代 知識105

1D1000||49

「ちよ、知識105ってなんです!?!?」

「魔道書のせいです。あ、読みます?魔道書」

「読みませんよそんなもの!大体クトウルフ神話技能がめちやくちや付与されるヤツでしよう!?!?」

「うん、正解」

「チクシヨォー!!」



「あの、上代さん、あれって…」

川崎は看板を指差しながら言う。

看板には八丁目と書かれていた。

「…おかしいな。今の桜田市に八丁目などないはずだが」

「え……?」

すると彼らの皮膚を冷たい風が撫でる。

それは生臭く、それでいて血の匂いがした。

彼らは風が流れた方を見る。

そこには片腕のない、戸成 葉月の姿があつた。

葉月の行方

「葉月ちゃん!? どうしてこんな所に?」

「待て、様子がおかしい」

川崎が葉月の右腕を見ると、肘から下が無くなっているのが見て取れた。彼女の衣服には血が飛び散って赤く染まっていた。

「こつちに来てはダメ…七丁目だけど七丁目じゃない場所…」

彼女は小さく、しかし彼らに聞こえる声量でそう言う。

そして、彼女はその言葉を残し霧のように消えていった。

▼▼▼▼▼

「SANチエツクの時間だア!」

「SANチエツク…豆腐メンタルにはなりたくない…」

「オイ、それはウチの雑賀のことかオイ」

「1/1d3です」

川崎 SAN55

1D100=21

「セーフ！」

「1の減少ですね…じゃあ描写に戻るかー」



葉月が消えた場所を暫く注視しているとピピピツ、と携帯の着信音が鳴る。

上代は携帯を取り出すと電話に出た。

『上代さん！聞こえますか？！』

「ああ、聞こえているぞ白澤」

川崎はその白澤と呼ぶ声から電話をかけて来た主が誰かを察した。

「それで、何があった？」

『さ、雑賀が急におかしな事を言いだして…それに葉月ちゃんも…』

「葉月…？とりあえず今の現在地は何処だ？」

『七丁目の住宅街です』

「そうか…とりあえず戸成の家に戻れ…それと葉月だがー」

その葉月は右腕がない葉月のことか？」

『え…？腕がない…？』

「…近くに腕が落ちていないか？」

『もしかして……。はい、ありました』

「あったか……。ならそれは誰にも見つからないように隠せ。バレたら厄介なことになる」

『は、はい。わかりました』

「俺たちも戸成の家に向かう。そこで落ち合うとしよう」

『わかり……。ました……。』

上代は通話を切ると、ポケットに携帯をしまった。

「その、彼はなんて？」

川崎は上代に問うた。

「葉月の事だ……。とりあえず戻るぞ……」

「は、はい」



「じゃあ全員戸成家に戻るといふことでよろしいかな？」

「はーい、質問質問。三枝と私はどうすればよろしいかな？」

「上代から電話がかかって来て帰るといふことでよろしいでしょう！」

「わかったよKP！」

「よし！じゃあ描写に戻るとしよう！」

さっさとRPに戻りたいようだ。

まだまだ先は長いぞ頑張れ。

「おっと、その前に上代のロールで俊之に言いくるめしなきゃな…」

上代 言いくるめ77

1D100=98

「さつすがあー！」

「なんでさ!!」

「流石上代だ。フアンブル力が違う」

「ここでNPCがフアンブルとかわるえる」

流石である。まだ導入なのにこのフアンブル量である。



「残念ですが…娘さんは見つけることが出来ませんでした…」

「本当にそれだけか？何か隠していることがあるんじゃないか？」

俊之は娘が見つからないためか苛立っているようだ。

すると上代をフォローするかのようには間髪入れずに三枝が言った。

「いえ、本当に何も見つけることが出来ませんでした…」

「…警察には連絡したが出抜いだそうさ。また何かあれば君達を呼ぶよ」

彼はそう言うとう室に戻って行った。

「とりあえず、今日は帰るとしよう。また会おうじゃないか探偵諸君」
「はい、上代さんもお達者で」

そして、彼らは後ろ髪を引かれる思いでそれぞれの帰路に着いた。

幕間の物語：中の人は茶番が好き

「なあKPさんよ…アンタこの十数話何してた…」

「何って…導入だよ雑賀くん」

「ああ、確かにアンタが書いてたのは導入だ…でもな俺が言ってるのはそこじゃねえ…」
「あ、確かにアンタが書いてたのは導入だ…でもな俺が言ってるのはそこじゃねえ…」
「いつにも増して雑賀さんの中の人はキレ気味のようなのである。」

「俺が言いたいのはだな…この十数話で導入までしか終わらなかつたことだよオ！」

「仕方ないじゃないか！二ヶ月のセッション保留期間！そして集まらない探索者！始まらない本編！ここで尺を伸ばさなきゃ早々に物語が終わっちゃうよ！他の人が書いたら4話くらいで終わっちゃう内容を番外編とかも書きながら内容を薄めつつ頑張ってきたんだ！褒めて！私を褒めてよ!!」

…こちらは半狂乱状態であつた。

まあ無理もないだろう。

第2部がリプレイ不可という事実を突きつけられたのは、つい先日の出来事である。

そんな中彼が取った方法は第3部のシナリオ製作と並行しての新第二部のシナリオ製作であつた。

いや、まあ半分自業自得でもあるのだが。

「ええい!!うるさい!お前が歩夢にリプレイ可能かを聞かなかったのが悪いんだよ!自業自得だゴラア!」

「ああ!確かに私の自業自得だ!もつと黽れ!黽れよオイ!」

「やだ変態ですよこの人!鈴風さん!変態ですよこの人!」

「キモーい!DMでいいのは40代からよねー!」

「ええい!貴様には言われたくないぞサノバビッチ!」

最早カオスである。

「…まああれつすよ。第2部の製作頑張って内容濃くするから許してヒヤシンス」

「…濃いつてどんくらいよ?」

「仮面ライダー4号です」

「ちよつと何言ってるかわからないです」

「TSUTAYA行ってこい」

分からない人はwiki見てTSUTAYAに行こう

「ねーねーKPさーん」

「ハイなんでしょうシヨタコン」

「私と三枝さんの出番が無かったような気がするんですけど」

「え？だって内容薄かったし…9割水のカルピスと同じくらい薄かったし…」

「ひ、酷い！あれでも私頑張ったよ！初の女性探索者で頑張ったよ！今からでも遅くないからほら！リプレイしようよ！」

「ええ…しようがないなあ…」



「何にもないですねえ…」

「ああ、何にもないな」

三枝と鈴風は暗い道を歩く。しかし暗闇のためか何も発見することが出来なかった。



「終了」

「確かに内容うっすいなこれ…」

「確かに薄いですね…」

「そもそも目星失敗しなけりやもう少し出番あったんすよ？原液ぐらいあったんすよ？」

「ええ…じゃあせめてシヨタ下さいよ…」

無茶振りである。

それにしても内容が薄過ぎである。最早水だ。

「てかさー、最初のあの歩夢さんの回想いるか？」

「ぶっちゃけいらんな…超いらぬい…」

「何でさーシヨタ殺しちゃうかなー」

「だって…だってシヨタ殺さないと尺稼げなかつたんだもん…」

「ほう、何故だね？」

「だってあのセツシヨンの日やったのって茶番だけじゃん…」

「…すまんかった工藤」

「誰だよ工藤…」

あとは茶番だったため割愛。

シリアスは続かない

あれから一週間が経った。

未だに葉月ちゃんの行方は掴めないままだ。

「…雑賀くん、どうでしたか？」

「駄目だね。警察は知らぬ存ぜぬで全く情報を明かそうとしない」

「そうですか…」

「白澤は？」

「買い出しに行きましたよ」

「そうか。ならいい」

話をしていると事務所の電話が鳴った。

三枝は雑賀に視線を送ると受話器を取った。

「はい、こちら探偵事務所です」

『三枝さん達に依頼をしたいのですが…』

「その声は和子さんですか？」

『はい。…そのよく話をしたいので家に来てくれるとありがたいのですが…』

「分かりました。すぐに行きます」

三枝は受け答えをすると受話器を置いた。

「雑賀くん、白澤に連絡を取ってくれますか？」

「あい分かった」

「そうです雑賀くん。少し頼みがあるんですが——」

「ああ、分かった。それについて調べておけばいいんだな？」

「頼みましたよ」



「えーつと、他にやることあるか？」

「少し上代について調べたいんですが」

「じゃあ三枝が上代について調べると言う——」

「いや、雑賀に任せたい」

「ええ？俺？三枝が行けばいいじゃないか」

「俺の探索者は少し探索したいところがあるもんで」

「分かったよ。上代についてだな？」

「ああ、頼んだ」

「任せとけ」

シリアスだが実はこのシナリオに上代についての表記はない。

何故かって？ KPの前探査者だからだ。そんなもんじゃない。

(ヤバイなノリで出しちゃったの失敗だったかなこれー。チートになったから処理し
たかったなんて言ったら殺されるなこれー)

「そ、それじゃあ描写に戻りますね——」



三人が戸成家に着くと既に川崎と鈴風がいた。

「どうも川崎さん。お久しぶりです」

「三枝さんも久しぶりです」

「それで、和子さん。依頼とは何でしょうか？」

「個人的に葉月を探して欲しいの：葉月のためなら何だつてするわ：」

「分かりました。正式な依頼として受けさせてもらいます」

「ありがとうございます」



「ねえKP何でもしていいんだよね？何でも」

「やだーもう三枝くんのエッチ」

「シヨタコンピッチには言われたくないです」

「おうゴラもう一度言ってみろやむつつりスケベ」

シリアスと言ったな。あれは嘘だ

「とりあえずどうします…?」

「そうだなあ…川崎と雑賀で警察署かなあ…」

「じゃあ残った我々は八丁目の看板があつた公園に向かうとするよ」

「え? 私残つて絵描いてたい。職業イラストレーターなんで」

「露骨なS A Nチエ回避嫌いじゃないよ」

「え? なにそれ告白? 三枝くん生意気」

最早カオスである。

「じゃあ公園組と警察署組の二手に別れることになりますね」

「はい、そうです」

「じゃあとりあえず描写は——」

…此処からが本当の本当に物語の始まりである

焦燥感

「それじゃあ警察組からやって行きますけども」

「はいよー」

「警察に行こうか」

「それじゃあー」

▼▼▼▼▼▼▼▼

彼らが警察署に着くと取材クルーが入り口に大勢居ることに気付く。

取材クルーは警察署から出てくる人物に手当たり次第に質問をしているようだ。

いずれも声が大きく雑賀たちがいるところまで聞こえてくるほどである。

「なんか…凄い人いますね…」

「うっわあ…俺ちゃん取材クルーって嫌いなんだよねえ…何かこうデリカシーないし…」

彼らが話をしていると取材クルーの1人が警察署から出て来た女性にマイクを向けた。

▼▼▼▼▼▼▼▼

「知識を振ればマイクを向けたクルーの名前を、聞き耳を振れば取材の内容が聞こえる」
「歩夢はどっち振る？」

「それじゃあ聞き耳を」

「じゃあ俺は知識だな」

川崎 聞き耳45

1D100〓4

「おおつ、クリティカルつか…今セッションのダイス目荒ぶってんなあ…」

「よし、次は俺だな」

雑賀 知識95

1D100〓89

「雑賀はそのクルーが馬野 鹿子という女性だという事が分かる」

「入れ替えたら馬鹿の（ry）」

「雑賀は、名前入れ替えたら馬鹿の子だなと…」

『……………』

考えることは一緒のようである。

若干鹿子が可哀想な気もするがまあ関係ないだろう。

「それじゃあ聞き耳の処理にー」



「なあ川崎、あれってジャーナリストの馬鹿子…じゃなかった馬野 鹿子じゃないか？」

「だ、誰だっけ…」

彼らが鹿子について話していると川崎の耳に鹿子と女性の会話が聞こえてくる。

「すいません、貴女も例の事件の被害者の家族ですか？」

「はあ!? 何なんですか貴女たち!？」

「少しお話を伺いたいんですけど？」

「やめてください! そんなに私たち家族の傷を抉って楽しいんですか!？」

「あ、待ってくださいよ」

そして鹿子たち取材クルーは女性を追って消えていった。

「…とりあえず入ろうか」

「そうですねえ雑賀さん…」



「うつひやあ…なんか感じ悪い人だなあ…」

「雑賀的に鹿子はどうでしょうか？」

「ダメだねありゃ。俺のタイプじゃない」

「俺もあれは少し嫌かなあ。川崎もキヤラの的に近寄らないと思うよ」

満場一致で嫌いである。

馬鹿子とか言われたりして最早衰れに感じるレベルだ。

「それじゃあ警察署に入ったところから描写をするね」



雑賀たちが警察署に入ると中はピリピリしたような雰囲気とする。

連日のマスコミからの報道で警官たちも焦燥しているようだ。

「嫌な空気だな……」

そして、彼らがふとトイレを見るとスッキリしたような顔をした者が出て来た。

ピリピリとした空気をぶち壊すような表情である。

そしてその人物はとも見知った者であった。

クール系キャラはキャラ崩壊を起こすの法則

「それじゃあ2人は目星どうぞ」

「あいさ」

「ほいさ」

川崎 目星55

1D100〓26

雑賀 目星70

1D100〓38

「えー、貴方達がふとトイレの方を見るとスッキリした表情をした上代がトイレから出て来ますね」

「上代さあん！」

「イメージがあー！イメージがあー！」

無事キャラ崩壊である

「とりあえず描写の戻るよ」



「か、上代さんどうしてここに!？」

川崎が上代に問いかける。

すると彼は腹を抑えながら言った。

「ん、ああ、お前達か。図書館で調査をしていたんだがな…急に催してしまつてな…図書館のトイレが工事中だったものでここを借りたんだ…正直言つて超辛い…」

(ああ…上代さんのイメージがドンドン崩れていく…)

雑賀がそう思うのも無理はない

今までクールぶっていた男が急に腹を抑えながらトイレから出て来たのである。

▼▼▼▼▼▼▼▼

「なんで警察署なんだ…」

「警察署の三軒隣に図書館があるからじゃないっすかね」

最早KPも自暴自棄である。

「上代を連れて警察に聞きに行くのはあり？」

「ありっす」

「やめとけやめとけ。どうせファンブって終わりさ…」

「確かに…」

「これでも上代さん元探索者なんだよう!強いんだよう!」

KP 涙目である。

ぶっちやけ泣きたい。

「ままああれだ…上代連れて警察に聞くなって事でいいね？」

「どうせコケて気絶してフルボッコだろ」

「もうやめたげよう！」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「あの戸成葉月の親族の者なんです…何か進展はありましたか？」

「ああ…また7丁目のヤツかよ…三又さーん！来てくれますー？」

警官は少しイライラしながら他の警官の名前を呼ぶ。

「はいはい…また例の事件ですね…とりあえずこっちに来てくれますかね？」

「あ、はい。わかりました」

そう言つて川崎と雑賀は生活安全課に通される。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「じゃあここで法律、もしくは知識半分どうぞ」

雑賀 法律60

1D100||95

上代 知識???

雑賀 アイデア65

1D1000||50

「あれ。確かに刑事ドラマだと刑事課だよなあ」

「ああ、普通はそうだ。今回の事件、何かがおかしいぞ」

そして彼らは生活安全課に通される。

そこで彼らは何故7丁目の失踪事件がまともに捜査されないのかを知ることになる。

RPは大事

「ーK P、生活安全課に連れて来られた理由を聞きたい」

「それじゃあ説得、言いくるめ、信用のどれかで振ってくれ」

雑賀 説得40

1D100〓64

川崎 説得70

1D100〓64

「待て、なんで説得で振った雑賀?!」

「ち、違う。これは誤解だ」

「とりあえず雑賀は失敗。川崎は成功ということで描写に戻りますね」

▼▼▼▼▼

川崎は刑事の後を追いながら考えを巡らせていた。

雑賀が遭遇した手の正体。自分が発見した片腕のない葉月のことを。

(いかにも信用できない怪しい事件だからか?人が大勢失踪しているのに生活安全課で捜査をする理由はなんだ?)

彼が物思いに耽っていると刑事が話しかけて来た。

「おや? どうかされましたか?」

「いえ、何故失踪事件なのに刑事課ではないのか? と思っただけです」

「…少し、こちらに来ていただけませんか?」

「え? あ、はい」



「そして君達は安全課の横の喫煙室に通されるよ」

「ねえ一つ気になることがあるんですが」

「ん? なんだい?」

「上代: 何してんの?」

「外でお茶飲んでます」

完全にネタキャラである。

「俺は午後ティー派」

「おつ、雑賀わかつてるじゃないか俺は生茶派だ」

「ほらKP お茶談義はいいからRP しようか」

「そうだな…」

KPは一度咳払いをすると続けた

「喫煙室の扉を開け、中に入るとー」



「これは本来話すべきではない事なのですが…」

刑事はそう言うのとタバコを取り出しながら続けた。

「昔つからこの中央区では失踪事件が起きてましてね…私も祖母から良く聞かされたんですよねえ…夜なんかに歩いたら「さすらさまのて」に連れて行かれるぞつてね…」

「神隠しつてヤツですか…?」

「まあ平たく言つてしまえばそういうものです」

そして彼はさらに続けて言う

「それにこの七丁目では昔から失踪事件が多いんですよ…昔は捜査本部とかも結成されたんですが今ではもう…」

「あの一つお聞きしたいことが」

「なんででしょう?」

「さすらさまのて、についてなんです…内容はどのようなものなんですか?」

「それ以上は私もわからないですよ…祖母ももう亡くなつてしまいましたし。後は図書館などの伝記などに載つてると思いますよ」



「ここで図書館かあ…」

「そういやさつきKPが露骨に図書館あるよ的なこと言ってたもんねえ…」

「じゃあ他に聞きたい事は？」

「特になし」

「それじゃあ刑事事は」それでは」と言つて戻つていくよ。2人とも聞き耳どうぞ」

川崎 聞き耳45

1D100〓95

雑賀 聞き耳25

1D100〓50

「こりや酷えや」

「雑賀さん小物作り得意なだけの平凡な男の子だからね仕方ないね」

「えー…あ、うーん…それじゃあ貴方達には『…昔…丁目は…弱る…、まさ…伊…の通り…』とだけ聞こえて来ます」

「うん、まるでわからない」

「同感だ」

「それじゃあここで一度白澤達の方に移るぞ。休憩タイムだ2人とも」

「あーい…」

「うーい……」

聞き耳を失敗し、重要な情報を逃してしまった2人。
彼らのRPがどのような結果を招くかはまだ誰にもわからない

推測

「えーつと…確か葉月を見た公園に行くんだったな」

「うん。今は公園に向かつてる感じ？」

「今はスマホのマップを見ながら向かつてるって感じ」

「OKOK」

鈴風はそう言うのと軽く伸びをした。

「それじゃあRP移りますか」



「えーつと、こつちに行けばいいのかわ？」

「確かそつちの筈です…。ーしかし八丁目ですか。にわかには信じられませんね」

「ん？どうしてだ？」

三枝のその発言の白澤は首を傾げる。

まるで、どうして八丁目信じられないんだ？とも思っているかのようであった。

「それなんですが八丁目は――」

「八丁目は今はない筈なんです」

三枝と白澤の会話に割って入り、鈴風が続ける。

「八丁目は大体十年くらい前に七丁目と統合されてもうない筈なんですよ」

「統合？またなんでそんな事を？」

「さあ？十年前は私まだ実家暮らしでしたから分かりませんね」

「2人とも、公園が見えて来ましたよ」



彼らは暫く公園を散策し、八丁目の看板を探す。

しかし八丁目と書かれた看板など見つかるはずもなかった。

「やっぱりありませんねえ…八丁目の看板」

「何処にも無いですね。やはり彼らの見間違いだったのでは？」

「いやいや、もうちょい探してみようぜ」

そしてふと白澤が目をやると…



「3人は幸運をどうぞ」

三枝

幸運65

1D100||44

白澤

幸運70

1D1000||59

鈴風

幸運50

1D1000||37

「おかしい…何故だ…何故出目がいい…」

「やだ怖い。超怖い」

おかしな事で怖がる探偵組である。

「成功ね…貴方達は葉月がいた場所を発見するよ」

「発見?どうやって?」

「おっと揚げ足とろうとしても無駄だぞ三枝」

KPはそう言って続ける。

「何、簡単にわかるはずだよ。何故、葉月がいた場所が分かるのか。」

——死臭が残ってるんだよ。腐った、とても鼻に付く匂いが」

「うわあ…マジかよ…」

「そうだよなあ…今まで忘れてたけどこれクトゥルフだもんなあ…」

PLは忘れていたがこれはクトゥルフである。

「それじゃあRPに戻ろうか」



「うっ…何ですかこの臭い…」

「なんだこりや…まるで生ゴミを数日放置したかのような臭いだ…」

「これは…」

鈴風

SAN 50

1D100=27

SAN現象0

白澤

SAN70

1D100=12

SAN現象0

三枝

SAN65

1D100=72

SAN現象1

三枝はその臭いを気持ち悪く思いながらも写真を撮った。



「ねえちよつと白澤メンタル硬すぎない？何？君のメンタルオリハルコンなの？」

「オリハルコン…？よくてミスリルくらいじゃね？」

「謙虚だなー！憧れちゃうなー！」

— KPと白澤がそんな会話をしている一方その頃、三枝と鈴風は

「ねえちよつとこれどう思う？」

「いやちよつと今回は三枝さんもヤバイと思うんですねー…」

「だよね…私今まで密室系のシナリオしかやった事ないからよく分かんないけど…」

「とりあえず今までの事を整理しよう…」

先ず初日、探偵組と川崎、鈴風の5人が出会うと

「そしてパーティーの途中で上代が現れたと」

「ああ、今の所一番怪しいのは上代だ」

三枝は推測を立てていく。

「これは推測だけど上代は何かしら関わっていると思うよ」

「どうして？」

「いや、まあただの推測だよ。杞憂に終わるのが一番いい…」

——ただまあ言えるのは、上代は何かしらヤバイって事だよ。クトゥルフ神話技能が30を超えてる時点で狂人だ。その点だけは警戒しておこう」

彼らは推測を立てる。それが今回のシナリオにどう影響してくるのかはまだ誰にもわからない。

警戒しすぎでシナリオブレイクを起こすのか。それとも——

メタな事は一回は言うのがお約束

「ーそれじゃあ全員目星どうぞ」

『ウーっす』

鈴風 目星65

1D100〓13

白澤 目星59

1D100〓72

三枝 目星65

1D100〓98

「ぐあああああ！」

「三枝の精神に20のダメージ！」

「大丈夫？ファンぶる？」

「ええ…とりあえず三枝は転けて横の電灯に頭をぶつけて1のダメージでどうぞ。それと幸運ロール」

三枝 幸運65

1D100=83

「ああん！」

「三枝が死んだ！」

「この人でなし！」

「俺は悪くねえ！」

ファンブルからのカオスである。

最早誰にも収集をつけることは出来ないのであつた。

◇◆

「えーつと、まあそれじゃあ落ち着いたところでRPに移りますか…」

「そうだな…」

「ファンブル…怖い…」

「いつ迄メソメソしてんのよ…」

「それじゃあRPに戻りまーす…」

▼▼▼▼▼▼▼▼

「とりあえず写真は撮りましたのでそろそろ戻り…」

彼が白澤と鈴風にそう言おうと後ろを振り返るとバランスを崩し横に電灯に頭を思いつきりぶつめた。

「ちよ、三枝あ!？」

「三枝さん大丈夫ですか!？」

彼からの返事はない。

「ああ…死んだか…」

「冗談は良いですから三枝さん担いでください。帰りますよ。」

「冗談通じないタイプの人か…」

そして鈴風はふと奥の電灯を見ると人間の手形を見つける。

しかしその手形は普通の人間の物より少々大きかった。



「鈴風は0/1D3のSANチェックをどうぞ」

「うええ…」

鈴風 SAN50

1D100||53

1D3||2

SAN現象2

「じゃあ鈴風はさっきの手形を白澤に伝える?」

「伝えて道連れにします!!」

「うわあ！一生恨むからなこのヤロー！」

「白澤は0/1のSANチェックです」

白澤 SAN70

1D100≦56

SAN現象0

「ズルイ！」

「はっははー！これが運なんだよ鈴風え！」

「騒いでないでとつととRPするぞ」



「白澤さん。あれって手形…ですかね？」

「ん？…ああ確かに手形だな…」

「でもちよつと普通じゃないですよね？」

「そうだな…とりあえず三枝を起こそう…話はそれからだ」



鈴風 応急手当て60

1D100≦39

1D3≦1

「…手形ですか？」

「そうだよ。あれを見ろ」

三枝 SAN64

ID100||77

ID3||3

SAN現象3

「これは…普通の人間の物より大きいですね…」

「そうだろ？正直言ってヤバイもんに首突っ込んだかもしれない」

「ええ…とりあえず今日は写真を撮って帰りましょう」

手形の写真を一枚撮り、彼らは帰路についた。

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

「次回！図書館組からスタート！お楽しみにね！」

「ちよつとこのKP何言ってるんだろ殴っていいかな」

「やめてください白澤さん！TRPG出来なくなっちゃうじゃないですか！」

次回に続く。続くとしたら続く。

話は進まない

「KPさんKPさん、ちょっと図書館組に移る前に連絡先の交換と伝承について調べておきたいんですけど」

三枝が肩を叩きながら聞いてくる。

俺はそれに爽やかな笑顔で返しながら言った

「リアル言いくるめ、どうぞ」

「な、何故ですかKP！よろしいじゃない！」

「三枝は伝承とか知らないと思うじゃん？調べたいなら理由どうぞじゃん？」

「アレじゃん？なんかこんな8丁目とか言われて今はないことを知ってたら、前の葉月ちゃんの件もあるし、非現実的なことかもしれないと思うかもしれないし…」

KPはそれを聞いて少し唸ったあとこう言った

「それだと伝承は出ないのでS市についてのことでおカルト＋図書館orコンピュータならいいですよ」

「オカルトと図書館で振りますわあ…」

オカルト 50

1 D 1 0 0 〓 9 2

図書館 7 5

1 D 1 0 0 〓 7 8

「女神は死んだ」

「鈴風と白澤はなんかやりたい事ある？」

「特にないかなー」

「俺もー」

それを聞いたKPは別室へと移って行った。

◆◇

「ねえ俺途中から記憶が無いんですけど何してましたかね」

「上代さんとお茶飲んでたんだよ」

「そう…だったのか…？」

相変わらず何処か抜けている雑賀である。

「あのう…雑賀君さ…川崎どこ行ったの…？」

「コンビニへ買い出しに」

「ああ…うん…」

そして会話が途切れる2人

元々コミュニケーション力の高く無い2人ではあったが2人きりになったことにより更にコミュニケーションが加速したようだ

「…上代君って存在意義あるの…?」

「あるよう…上代は地味にお助けしないNPCだけクライマックスでちゃんと活躍するよう…」

暫くそのまま駄弁っていると玄関から音がした。

「どうやら川崎が帰って来たらしい。」

「ただいま」

『おかえり』

女神である。

女じゃないけど女神である。

「ええとまあそれじゃあ川崎が雑賀と上代を連れて警察署を出ようとするところからスタートだね」

▼▼▼▼▼▼▼▼▼▼

川崎が警察署を出ようとする時背後から声をかけられる

振り向くと先程の刑事駆け寄って来た。

「ああ、まだ居ましたか」

「あの何か用で？」

「ええ、何かあった時のために連絡先を交換しておこうかと」

「ありがとうございます。もし何かあったら連絡させてもらいますね」

川崎がお辞儀をすると刑事は会釈をしてその場から去って行った。

◆◆

一方、上代と雑賀の2人はお茶談義を繰り広げていた。

「やっぱりダーズリンが一番なんですよって上代さん……」

「いやいや、日本人と言ったら生茶だろう」

どうでもいいので割愛

◆◆

川崎 幸運60

1D100||12

川崎が外に出ようとすると例の女性記者がいた。

彼女は川崎にマイクを向けると

「もしかして貴方も失踪事件の家族とかですよね〜」

その瞬間、川崎は嫌な予感を感じた。